煽ってないと死んでしまう人(笑)が英霊と仲良くする物語

聖籠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは煽り大好き人間が英霊相手に煽ったり喧嘩を売ったりゲームばっかりしたりまあ色々しながら人理を救う物語です

目次

プロローグ
所長との鬼ごっこ ―――― 1
え？どうなってんのコンセント繋がらないんだけど ―――― 5
不謹慎だがレイシフトむちゃくちゃ楽しい ―――― 9
初めての召喚…頼む爆死だけは 13
魔力切れが1番辛いぜ ―――― 18
撃退 ―――― 22
後日談 ―――― 28

プロローグ
所長との鬼ごっこ

どうも、この小説から読み始めた人ははじめまして。デート・ア・ライブから読みに来た人はこんにちは。みんなの星野　琉くんだよ（^　—　—）

え？いきなりメタいって？知るかそんなこと！今は所長（笑）から逃げてるんだよ

どうしてこうなったかというと、そうあれは1億…いや三十分前の話だったかな。

俺はどこにでもいる普通の魔術師なんだけど…あ！そうか俺。魔術の研究とかしてないから魔術使いか…。まあそれはどうでもいいんだ。いつもどおり学校（魔術学校）に行ってたんだけどね、なにやらカルデラ…いや間違えたカルデアとか言うところがレイシフト？の適性検査をしてたんだよね。まあ、俺も生徒ですしー検査を受けたんですけどーなんとね適性が１００％だったんだよ。どうだすごいだろ。そこまでは良かったんだよ。その後が問題。検査が終わるとカルデアの所長を名乗る名前の長い人が

「あなた、うちに来なさい」

「だか断る」

「なんでよ!!」

「だってどんな組織か知らないしー」
「あなた、検査を受ける前の話を聞いていなかったの！この私が直々に話してあげたというのに！」
「あ！それはすいません。最近ゲームを徹夜でやって眠たかったから寝てました（笑）。でどんな組織ですか？」
「簡単に言えば人類を生存させるための組織よ」
「え…やっぱり胡散臭そうなので遠慮します。それでは」
「え？ってこら待ちなさいーい　」
　というわけで最初の場面になるわけだ。しかしなぁー絶対に入ったらゲームする時間がなくなるよなぁー。最悪ゲームは持って入れなさそうだし。
　あ！そうだ
「所長さーん。俺の提案を受けてくれるなら行ってもいいですよー」
「なによ。言ってみなさい。」
「ゲームの持ち込みとそれのできる自由な最低限の時間を確保してくれたらいいよ」
「それくらいなら別にいいです。それじゃあきてくれますね？」
「いいですよー」
　ということで琉のカルデア行きが決まった。

「あ！そうだ下にステータス書いとくね」

星野　琉（せいや　りゅう）

性格　ドS

好きなもの　表情豊かな人　ゲーム　菓子づくり

嫌いなもの　ホラー系　勉強

ステータス

筋力E－

耐久E－

敏捷EX

魔力A＋

幸運B

能力EX

能力一覧

アンサートーカー（金色のガッシュ）

みんなの先生。聞いたことの最適解、答えを瞬時に出してくれる

操作

色々と操作できる能力。例えばベクトル操作、重力操作、魔力操作など汎用性に優れ

ている

精霊憑依

自分にとある精霊の能力を憑依させる能力。何ができるようになるかは物語の途中で出てきます

能力創造

文字通り好きな能力を作れる能力。制限として一つしか作れないこと。自分では能力は決めれても性能は完全にランダム。作った能力は一日変えられない。クールタイムで３６時間待たなければならない。

え?どうなってんのコンセント繋がらないんだけど

所長に連れられてカルデアに行ったのはいいが…なに?なんでわざわざ南極大陸に建てるわけ?魔術は秘匿されるものということは知ってるけど場所は別にもっとあったでしょ?まあ、しかし中に入って生活してみると意外と住み心地がいい。欲を言うならもう少し広い部屋がよかった。

部屋に荷物を置いたあと、カルデアの案内をレフ教授がしてくれた。でもこの教授なんか胡散臭いんだよなー。これから羽帽子って呼ぼう。羽帽子に案内してもらっていると可愛らしい女の子がいた。見た感じ同い年。彼女のことも羽帽子が紹介された

「マシュ。この子が新しく入ってきた星野琉くんだ。」

「よろしくお願いします。あの…なんて呼べばいいですか?」

「んー、星野でも琉でも好きな呼び方でいいぜ」

「それでは琉さんと呼ばしていただきます。」

「琉くん。彼女の名前はマシュ・キリエライトだ」

「私の方も好きに呼んでくれて構いません」

「そうだな。じゃあ基本的にはマシュって呼ぶわ。よろしくなぁー」

そして何日かたったある日、どうやら今日はレイシフトするらしい。なのでカルデアスがある場所に行こうとする最中人が倒れていた。どうやら寝ているようだ。
「ふむ、どうやらこいつは床で寝ると快楽を得れる特殊性癖を持っているようだ」
「たぶん違いますよ。琉さん」
「あ、マシュいたのか」
俺がくだらないことを呟いていると横から野生のマシュが現れた。
「なあ、マシュこの人誰ぞよ」
「このお方は今日最後に来た一般人から募集したマスター候補の方です」
「え?大丈夫なの?魔術って秘匿されるものだよね?それにこんな危ない世界に一般人連れてきてもいいの?」
マシュと会話しているとマスター候補の女の子が起き上がった
「えーと、なんでこんなところにいるんだろう。しかもむちゃくちゃ眠いし」
「はじめまして、先輩」
「ん?なんでマシュはこの子のことを先輩って呼ぶんだ?」
「はい、それはですね。今まで見てきた人の中で一番人間らしいからでしょうか」
「え?俺あんまり人間らしくないの（；ω；）」
「いえそんなつもりじゃ　」

「なーんてね。それじゃああとはよろしくー」
俺は後のことをすべてマシュに任せて俺は自分の部屋に戻ってゲームを続けた。あれ？なんか忘れてるような？

一方その頃
「あいつ、またサボったわね。今度こそゲームを取り上げるか、壊してやろうかしら 」
と琉のことを真剣にどうしてやろうか考えながら話をしていると今日来た一般人のマスター候補が寝ていたのでひっぱたいていた

「あ…誰かが俺のせいで叩かれてる気がする。まあいいや」
そしてその数分後やっとゲームのラスボスまで行き、セーブをしようとするといきなり真っ暗になり電源が切れた
「は？おいおい冗談だろ。あんな面倒くさいところまでまたやらないといけないの？」
と軽く絶望していると何やら爆発があったようなのでこのような自体になったらしい
すると、外からドクターとさっきの子が話しているのが聞こえたので扉を開けて、合流した

「何があったのー。ドクターー」
「なんで琉くんがここにいるんだい?コフィンにいるはずじゃ⁉」
「ああ、ごめん。忘れてた」
「ええ⁉そんなことあるの⁉まあいいや。琉くんも避難するんだ」
「え?ついていくよ。現場が爆発したんでしょ?なら俺の魔術が役に立つからついていく」
本音は面白そうだから。それは言わないとして。どうやらこの女の子。マシュを助けに行くそうだ。この子勇気あるなー。そんなことを思っていると爆発現場に来た
女の子は必死にマシュを探し、俺は火がついたところを消していた。
すると、何やらアナウンスが聞こえてきて、その直後妙な浮遊感に襲われがらっと景色が変わった

不謹慎だがレイシフトむちゃくちゃ楽しい

突然景色が変わったので驚きはしたもののすぐに落ち着いた。周りを見てみるとあたり一体火の海でところどころに動く人形の骨がいる。

「なんとも不思議なところに来たな。でもこれがレイシフトならすごいな。不謹慎だけどものすごく楽しい」

そんなことを言っていると、近くにいた骨が近寄って来た。そして、俺に剣を振り下ろして来た。しかし、その剣は俺に当たる前に弾かれた。

「うん、問題なく反射してるな」

俺はいつも自分の周りに攻撃などを反射する膜を作っている。強いのは強いんだがこの膜一定以上の攻撃力を持った攻撃は反射出来ないんだよな。まあ膜の強度を上げてもいいんだけど魔力がすごい勢いで持っていかれるからな。ちなみに膜が破れたらガラスが割れたときみたいな音がする。

と脳内で説明している最中も骨が攻撃をし続けているのでうっとおしくて、思いっきり殴ったけど全然傷がつかなかった。なんなら俺の手のほうが痛くなった。くそ、こいつら牛乳の飲みすぎだろ。

次はベクトルを操作して思いっきり殴ると粉々に粉砕された。
「なんだ。こっちは効くのか。」
そこら中の骨を倒せることが分ったから多分一緒に飛ばされたであろうマシュとオレンジ色の髪の女の子を探そう。そしてあちこち探していると遠くの方から戦闘をしているであろう音がしてきたので行ってみるとオレンジ色の髪の女の子と何故か服が痴女みたいな服になっているマシュがいた。え…マシュあんな格好していたっけ？
とりあえず苦戦しているようなので助けに入りましょうか。
「くらえ、俺の超必殺、飛○文化アタッーーーーーク」
俺はそう叫びながらマシュと戦っていた骨となんか黒いモヤがかかった人を吹き飛ばした。マシュは一瞬呆けた顔をしていたがすぐに盾を構えた
「誰ですか!?」
「俺だよ俺俺」
「もしやこれが噂に聞くオレオレ詐欺ですか!?」
「あ、なんだツッコミできるぐらい余裕はあるんだ。」
「ありがとうございます。えーとどう呼べばいい？」
「星野琉だから、琉でも星野でも何でもいいぜ。ところでそっちは？」
「藤丸立香です。好きに呼んでくれていいよ。琉」

「じゃあ、俺も立香って普通は呼ぼうかな」
「親睦を深めているところすみません。琉さん、なんか聞こえませんか？」
「ん？あー、言われてみれば」
どっかで聞いたことあるんだよな。このヒステリックな声
……あ　所長だ
声のする方に行ってみると所長が骨に追いかけられてたので助けてあげた。
「助けてくれたことには感謝します。しかし、なぜよりによってあなた達がいるのですか？あとロマニなんであなたが指揮してるのよ!!」
『それはかくかくしかじかで』
「なんですって!?今すぐマスター達をコールドスリープさせなさい!!」
『了解』
「仕方ありませんこの三人でこの特異点を攻略します。」
「おい、あんた達。俺も入れてくれよ」
男の声がしたのでそちらを見ると魔術師みたいな男がいた
『サーヴァント反応!!その人は英霊だよ！さっきみたいに襲ってくるかもしれないから気をつけて！』
「まあまあ、ドクターそんなに警戒しなくても、俺は星野琉って言うんだ。よろしくな

クーフーリンさん（・∀・）ニヤニヤ」
「なんで分かったんだ?ランサーとしての俺はまだしもキャスターの俺はそうわかるはずがないぜ?」
「ちょっと俺の魔術が便利なもんだからな」
「そうか。そこにいるお嬢ちゃん方俺は的じゃあないからな。」
　クーフーリンは敵意がないことを示し、俺らと合流した。クーフーリンによると聖杯戦争をしていたけど聖杯が汚染されてこんなことになったらしい。そして今聖杯を破壊しようとしていたらしい。
「へー、すぐ手を出さないところを見ると誰か聖杯を守ってんの?」
「まあな。見ればすぐにわかるぜ」
　ということで今からそのボスのところに行こうとするとドクターが
『先に霊脈によってくれないかな。そうしたら物資とかも送れるから。あとマシュの盾を使って英霊召喚ができるから』
「了解。」
　霊脈に向かう途中マシュが自分の宝具が展開できないと俺たちに相談してきた。
　するとクーフーリンが特訓してくれたのでなんとか宝具を展開することができるようになった。

初めての召喚…頼む爆死だけは

なんやかんや道中にあったが霊脈にたどり着いた琉と愉快な仲間たち＋ａ。救援物資等を送るにはマシュの盾を使うと出来るらしい。その盾有能すぎじゃね？と思ってしまった。

『立香ちゃんはマシュとクーフーリンと契約してるから体の負担がかかるからやめておくとして、琉くんは召喚をしようか』

という通信がきた。召喚方法は何やら星型の虹色の石　聖晶石を3個使うか、呼符と言うアイテムを使うと出来るらしい。ドクターがカルデアから3個呼符を送ってくれた。

1回目

なんか麻婆豆腐が出てきたんだけど？

『ああ、言い忘れたけど、サーヴァント以外にも概念礼装というものが出るからね。概念礼装はサーヴァントを強化できる物なんだ。だから必ずしもサーヴァントが出るとは限らないんだ』

■■■■は？そんなの俺絶対に爆死するよ？概念礼装だけしか出ない気がするんだけど？■■応使えるかもしれないから、アンサートーカー先生で調べておくか

【とても辛い。これを食べられるのはもはや人の域を超えている■■】

え？そんな恐ろしいものなの？どんだけ辛かったらそんな説明■文が出てくるの？

まあ、いいや。２回目行こう

２回目

ん？銃と銃弾？銃とか分からないんだよな。調べてみよ

【トンプ■ソン・コンテンダー　と起源弾×５】

【起源弾■■　粉状にすり潰した衛宮切嗣という男の肋骨を込められた弾丸。　この弾丸を用■いて魔術を撃ち抜くと、魔術回路にまで効果が及ぶ。したがってその魔術を行使した術者の魔術回路は全て切断された挙句、滅茶苦茶に繋げられる。こうして魔力が走ったままショートした魔術回路は、発動中の魔術の強さに比例した破壊のフィードバックを肉体に齎し、最悪再起不能の致命傷を与える。　】

うわ…その人すげぇな。自分の助骨とか俺はすり潰すことなんて出来ないわ。うん、強そうなのでたけど今の俺じゃ使えないな。

最後行くか

って気軽に言ってるけどサーヴァント一体も出てないじゃん!!うわー出なかったらどうしよう。絶対に所長が怒るしなー。別に俺は精霊憑依があるけど使ったらしばらくは魔法使えないしな。

頼むぞ。なるべく強くて仲良くやっていけそうなサーヴァントでお願いします。

あ…能力創造でガチャ運が上がる能力を創造すればよいのでは？
よし、そうしよう。
えーと、能力　ガチャ運をあげるで
「創造（クリエイト）」
えーと、能力の性能は？
（ガチャ運上昇…1回だけ自分の望むとおりになる。デメリット…使ったあと一時的に自分の魔力最大量が減少）
まあ…デメリットはあれだけどいい能力だ。さっそく使ったみよう
「創造（アクティブ）」
…なんか、運気が上がった気がしなくもない。まあいいや
それではラスト
召喚サークルに呼符を投げ入れると2回目までとは比にならない程の光が出た。思わず目をつぶってしまい、目を開けるとそこには桃色の袴に髪がピンクかかった白い髪に刀を持った女性が居た
「　セイバー、新撰組一番隊隊長、沖田総司。召喚に応じ、推参致しました！　」

どうやら俺はすごい英霊を召喚したのかもしれない。

？沖田総司って女の子だっけ？

魔力切れが1番辛いぜ

前回のあらすじ。琉は英霊召喚いやガチャをさせられた。３回中２回は概念礼装だったが最後に創造で運をあげ、見事沖田さんを召喚したのだが、沖田さんが男ではなく女の子であることにみんな驚いている。

まあ、そんなことはさておき無事英霊も召喚できたのでとりあえず聖杯の元に行くため琉達は洞窟へ向かうことにした。洞窟に入って少しすると一体のシャドウサーヴァントがいた。

「もうここまで来たか。」

「はい、ここまで来ました。なので通りまーす」

「私が通らせるとでも?」

「なんか優しそうだったので。しかし、通してくれない。なら行け沖田さん！出番だ！」

「はい、わかりました！よーし沖田さん頑張っちゃいますよー」

沖田さんと相手サーヴァントが対決しようとした瞬間沖田さんが吐血した。大事なことなのでもう一度言おう。沖田さんが吐血した。

あれ?もしかして相手がもう攻撃したのか?

「こんな所で病弱のスキルが…」
病弱？ちょっと見てみよう。へー、病弱ってスキルになるんだ。じゃあ、仕方ない。
「俺が出るとしよう。」
「いや、なんでさ!?」
相手サーヴァントの的確なツッコミさては相手は生前苦労人だな？
「ただのマスターと思ってもらっちゃ困る。ただのマスターだ」
「結局ただのマスターじゃないか！」
いや、まあね。奥の手の精霊憑依を使ったら多分勝てるよ？でもね…あれ使ったら魔力がすっからかんになるから動けなくなるんだよなー。まあいいや
「精霊憑依」
すると琉から、神々しいオーラが溢れ出す。
『これは！みんな、琉君がハイサーヴァントになった！これはすごいことだよ！』
「まあ、ハイサーヴァントというより、力貸してもらってるだけだから。原理はハイサーヴァントが身体借りて召喚される時の逆だから。俺があっちの方を引っ張って来てる感じ。ちょっと失礼だけどね笑」
琉は笑いながら言っているが周りは結構引いていた。
「そして能力の一部として」

　さっき当たった麻婆豆腐のカードを出すとカードが光だし本物の麻婆豆腐が出てきた。
「こうやって概念礼装のカードを実物として出して使える能力がある。そしてこの麻婆豆腐は気絶するほど辛いらしいです。」
　琉が投球する構えをとると、麻婆豆腐をシャドウサーヴァントに思い切り投げつけた。相手は判断出来たようだが身体が動かなかった。足の方に違和感があると思って見てみると
「なに?!」
　影が足を掴んでいた。
「俺。今日の能力創造使ったんだけど、精霊憑依したら即座にクールダウンが終わるんだよ。まあ1回しか無理だけどね」
　琉がそう説明し終えると麻婆豆腐が当たりシャドウサーヴァントは気絶した。
「なんか、この勝ち方でよろしいのでしょうか?」
「なんか、納得出来ない勝利だったね。」
「あいつ、面白いな」
「マスター。結局沖田さん、役に立てませんでした。でも能力作れるんだったら沖田さんの病弱ぐらい治してくだいよー」

「ふはははは、勝てばよかろうなのだぁぁぁぁ」
「もう助けてレフ」
色々カオスな終わり方で全員思ったことを言って、奥に進んでいた

撃退

琉達は奥に行くと聖杯らしきものとその前で佇んでいる人物がいた。
「もしかして、あれが聖杯？」
「ほんとにあるなんて、なぜこんな極東の島なんかに」
「ん？今なんか俺の故郷ディスらなかった？」
「そうですよ！私たちの故郷をバカにしないでください！」
「お前さんたち、なんか話がだんだんとズレてやしないか？まあいい、あそこにたっている奴が誰だか察しの良い奴なら分かるだろ？」
クーフーリンがそう言ってきたので目の前の人物を観察すると手には何か禍々しい剣を持っていた。
『まさか！気をつけてあれは恐らく聖剣エクスカリバー！ということはあの人物はアーサー王だよ！』
え？みんななんでそんなに分かるの？一般人の立香ちゃんが分からないのはいいけどなんで他は剣を見ただけでエクスカリバーってわかるんだよ？なに？変態が多いの？

「あのねえ、魔術師としては分かって当然なの。分からないあなたの方がダメなのよ。」
「あ、ナチュラルに人の心読むのやめてもらってもいいですか？」
「いまさっきのはマスターの顔に分からないって書いてるようなものでしたよ。流石の私も気づきますよ」
沖田さんまで…どうやら、俺には味方がいないそうだ。ピエン
「あれ？でも男性というより女性じゃない？あれ」
『そうだね。多分宮廷魔術師のマーリンの悪知恵だろう。まったく本当に趣味が悪い』
「見た目は華奢だか魔力放出を使って攻撃してくるから攻撃の一撃一撃がバカみてぇに重いから気を付けろよな。」
「人間弾丸か？ほうそいつはすげぇな。じゃ、頑張れよ」
「あなたも戦うのよ！このばか！」
俺がちょうどいい岩を見つけて座ろうとすると所長に殴られた。しかも2回
「殴った！しかも2回も親父にも殴られたことないのに！」
「何言ってるのよ！こんなときに！」
「すいません。でもアーサー王、マシュに興味があるみたいですよ？」
「ほう、よく分かったな。そこのお前」
適当に言ったら当たってたらしい。

「セイバー。お前喋れたのか」
「何を言っても聞かれているからな。案山子に徹していたわけだ。ところでそこの小娘、さっき言ってた通りお前の宝具に興味がある。盾を構えろ」
　するとアーサー王の剣から禍々しいオーラが溢れ出した。そして同時にマシュもみんなを守るため宝具を展開する準備をし出した。
「『卑王鉄槌』極光は反転する。光を呑め…　エクスカリバー・モルガン！」

「宝具展開します！ロード・カルデアス！」
　２人は同時に宝具を展開し、激しい攻防が続いた。するとアーサー王の後ろに１つの影が舞い降り、アーサー王を炎を纏った剣で貫いた。
「なっ！どうして貴様がここに。さっきまで岩に座っていて!?」
「いや、明らかに技のぶつかり合いして後ろが無防備になるのは明白だから天井をゴキブリのように張って来ただけだよ。卑怯とは言わないよね？こっちも命がかかってるんだ」
　琉がそう言うと剣を引き抜きその場から離れた。アーサー王は倒れ、消え始めた。
「まったく、恐ろしいマスターも居たものだ。今回は私の負けだ。しかし今度あったら容赦はしないぞ。」

「おお、怖い怖い」
「それと忠告をしておこう、グランドオーダー。聖杯を巡る戦いはまだ始まったばかりだ。」
　そう言うとアーサー王は消えていった。
「そいつはどう言う…」
　クーフーリンが言いかけたところでクーフーリンの体も消えかけていた。
「時間切れか、仕方ねぇ。今度呼ぶ時はランサーで呼んでくれよな。それじゃあ、またな」
　そう言ってキャスターも消えていった。琉達は奥に進み、聖杯を回収しようとするが聖杯が突然飛んで行った。飛んで行った方向を見るとそこには意外な人物がいた。そうレフ教授がいた。所長はレフを見るなり近寄ろうとするがそれを琉が止める。
「教授が黒幕だったとはね。ならすることは1つだよな!」
　琉が斬り掛かるがレフ教授の目の前で止められてしまう。
「危ないじゃないか。これだから人間は…。人間ごときではその魔術は抜け出せないぞ。」
「へえ、魔術か…。そいつはいい事聞いた。それじゃあ、これでも喰らえ!」
　捕らえられていた琉が手に拳銃を具現化させるとそれを発砲した

「ふん、そんな攻撃では…」
　レフが何か言おうとしたそのとき、急にレフが血を吐き出した。
「貴様！一体何をした！」
「いや、ちょっと魔術回路をめちゃくちゃにしただけだよ。しかしこりゃいい、起源弾気に入ったよ」
「ちっ！仕方ない。覚えてろよ！」
　そう言うとレフは消えていった。
「ふう、終わった終わった。」
「何が終わっただよ！色々ありすぎて何が起こったか分からないよ！」
「そうですよ！結局沖田さん戦ってませんし！」
「レフがレフが」
「琉さん、頭が混乱してきました…」
　思い思いに琉に文句を言うが
「え？俺、敵を倒しただけだよね？なんでこんなに呆れられてんの？展開が早すぎるって？そんなの作者に言え」
　と琉もメタい事を言うとロマンから通信が来た
『混乱してるとこ悪いけどレイシフトから戻ってくるよ。気をつけてね』

一同は混乱したまま、目の前が真っ白になった

後日談

レイシフト先から戻ってきた琉達だったが立香は初めてのレイシフトのせいか昏睡しているようだ。1、2時間目もあれば目が覚めるようだ。
「みんな、お疲れ様。戻ってきて悪いんだけど悲しい話があるんだ。」
「なんだ。ドクター」
「話す前に起き上がろうか？琉くん？」
「無理ぽ」
ドクターの視線の先には床にうつ伏せでいる。琉の姿が。精霊憑依を使ったことでほとんど魔力が残っておらず動けずにいる。
「よし、沖田さんかマシュ魔力すっからかんだから支えてくんね？お姫様抱っこでも可」
「マスター。それはいいですけど私消えちゃったりしませんよね？魔力無いんですよね？」
「いや、沖田さんが残っていられるだけの魔力は予め残しておいた。だから頼む支えてくれ」
琉が沖田さんにそう頼むと沖田さんは肩を貸してくれた。

「よし、それじゃあさっき言ってた話だけど実は所長が亡くなったんだ」
「所長が…」
レイシフトに行っていた琉達はその話を聞いた瞬間目に見えるほど落ち込んだ。
「ドクター。死因は？」
「爆発による死亡だよ。」
聞くところによると所長は1番爆発の近いところにおり、爆発に巻き込まれて即死だったらしい。
「そうですか…いつも色々言ってきてたけどいい人だったな。落ち着いたらお墓作ってあげたいな」
「よし！この話はここで終わり。また立香ちゃんが起きたら連絡するから部屋で休んでおいで」
ドクターが手を叩きそう言ってきたので立香が起きるまで休ませてもらうことにした。
「じゃあ、沖田さん頼んだ。」
「任せてください！」
沖田さんに連れて行ってもらい部屋に戻りベットに横になった。
「落ち着いたことだし改めて自己紹介といきますか」

「いいですね！」
「まずは俺から。名前は星野　琉。どこにでもいる一般魔術師だ。得意なことはゲーム、煽り。使用魔術は操作、能力創造、精霊憑依。これからよろしく」
「次は沖田さんですね。名前は沖田総司。クラスはセイバーなんですが…ちょーっと他のセイバーの人達より耐久と対魔力が低めです。あと注意点として動きすぎる病弱のせいで吐血します。」
「生前の病と民衆の抱いた心象のせいで病弱として引き継がれのが痛いな。スキルとして着いてるからどう頑張っても剥がせないしな…」
　お互いのことについて話し合ってるとドクターから電話が入り立香ちゃんが起きたらしいので今後のことについて話すらしい。部屋に着くとドクターとダ・ヴィンチちゃんが話し始めた。今後の目標としては歪んだ過去を直せば人類を救うことが出来るらしい。
「なるへそ。わかったやるよ。ていうかやるしかなくね？」
「それで今の戦力じゃ心もとないから英霊召喚しようか。今回は3回ずつ挑戦してもらうよ　」
「3回チャンスが…頑張ります！」
「はぁ、またあのガチャガチャか…概念礼装だけって言うのは勘弁して欲しいな。」

召喚するために部屋を移動し、立香ちゃんから召喚を始めた。

一回目

「よう。サーヴァント・ランサー、召喚に応じ参上した。ま、気楽にやろうやマスター！」

「あ、クーフーリンさんだ！よろしく！」

「嬢ちゃんか！本当に呼ばれるなんてな。こっちこそよろしくな」

2回目

「サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上した」

「まさか…激辛麻婆豆腐を投げた時の被害者が来るなんて。まあよろしく（^ ω^）ニコニコ」

「なんだその腹立たしい笑顔は…まあ召喚されたからにはきちんとやるさ。よろしく頼む」

3回目

凛のペンダント

「わあ。綺麗」

「私はそのペンダントを知っている。ある一族が魔力を込め続けてきた宝石だ。実物化出来たなら魔術師にとっては素晴らしい力になるだろう。」

「次は俺の番か」

一回目

「――召喚に応じ参上した。

貴様が私のマスターというヤツか？」

「あ、初めまして」

「初めましてと言いたいところだかあの時の言葉は覚えているな？」

「いや、覚えてないです。そもそも味方になったので許してください。お願いします。」

2回目

「――問おう。貴方が私のマスターか」

「はい、あなたのマスターです。よろしくお願いします」

3回目

愛の霊薬

「どれどれ…うわ効果えげつな。」

「どんな効果だったんですか？」

「沖田さんの病弱が治る。と言うのは冗談でサーヴァントでも抗えない惚れ薬だって。いる？」

「いりません。それこそ敵に厄介なサーヴァントがいたら飲ませればいいじゃないですか。」

「パチン（＊，―^）（。天才」

こうして各自召喚は終わったのだが…

「なあドクター。俺のところだけなんかバランスおかしくね？全員セイバーかつ顔がほとんど同じなんだけど」

「いや、僕に言われても」